

有明工業高等専門学校		開講年度	令和04年度 (2022年度)		授業科目	居住地計画論
科目基礎情報						
科目番号	AC042			科目区分	専門 / 選択	
授業形態	授業			単位の種別と単位数	学修単位: 2	
開設学科	建築学専攻			対象学年	専1	
開設期	前期			週時間数	前期:1	
教科書/教材	必要に応じて配布資料あり					
担当教員	正木 哲					
到達目標						
1. コーポラティブ以前の集合住宅におけるコミュニティ形成の技法を説明できる。 2. 集住の意味、集住システムを説明できる。 3. 居住者参加の集住-コーポラティブ住宅をはじめ、現代の集住のありようを説明できる。						
ルーブリック						
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安(可)		未到達レベルの目安	
評価項目1	コーポラティブ以前の集合住宅におけるコミュニティ形成の技法を十分に説明できる。		コーポラティブ以前の集合住宅におけるコミュニティ形成の技法を説明できる。		コーポラティブ以前の集合住宅におけるコミュニティ形成の技法を説明できない。	
評価項目2	集住の意味、集住システムを十分に説明できる。		集住の意味、集住システムを説明できる。		集住の意味、集住システムを説明できない。	
評価項目3	居住者参加の集住-コーポラティブ住宅をはじめ、現代の集住のありようを十分に説明できる。		居住者参加の集住-コーポラティブ住宅をはじめ、現代の集住のありようを説明できる。		居住者参加の集住-コーポラティブ住宅をはじめ、現代の集住のありようを説明できない。	
学科の到達目標項目との関係						
学習・教育到達度目標 B-2						
学習・教育到達度目標 B-2						
教育方法等						
概要	これまでの不特定多数という計画理念による、主体なき、極論すれば、単なるモノづくり的居住地計画は行き詰まり、世界的にも各地で破綻をきたしている。これを打開する方策としては、集住主体を何らかの形で育成すること、つまり、居住者がどれだけ居住地の主体になりうるかが鍵と考えられ、この集住主体を居住地計画に取り込めるプランナーとしての自覚を促すことが本教科の目標である。そもそも、建築技術者は利用主体の要求を捉え、それに応じた空間を創造することが使命であるが、実際には利用主体の要求自体が明確でない場合が多い。つまり、言い換えると利用主体自体が生活をイメージできていない。したがって、これまでのように利用者の顕在化した要求を捉えて空間を創造するという論理では対応しきれなくなっており、さらに一步論理を進めて利用者とともに潜在的な要求を顕在化させる必要がある。 この潜在的な要求を顕在化させるということは共に生活を創ることにほかならない。したがって、居住地計画に限らず、建築技術者は利用主体とともに生活を創り上げることに関わらねばならなくなっており、この資質を育成する意味は大きい。 集合住宅の計画はすでに本科3年の住環境計画で学習しているが、それはこれまでの近代住居理論に基づき居住者の生活を静的に捉え、集合形式や平面・断面構成など建物のありようを中心にしたものである。本教科はその発展であるが、むしろ、住民の集合生活(集住)そのものを問題にしている。その意味では、建築計画で学習した他施設についてもその発展として位置づけることができる。なお、この科目は企業で建築の設計を担当していた教員が、その経験を活かし、集合住宅の計画手法等について講義やゼミ形式で授業を行うものである。 本科目は、SDGs「11.住み続けられるまちづくりを」に対応する。					
授業の進め方・方法	学生のレポート（レジュメ）中心にゼミ形式で確認してゆく。					
注意点	本科で学んだ住環境計画の知識は前提条件として必要である。建築の他の専門科目の知識はそれほど必要なく、人の集団形成を対象とするので、むしろ、教養の社会学、都市社会学、心理学などの知識を必要とし、また、各地のまちづくり運動の実践例なども参考になる。学生のレポートを中心にゼミ形式で進めるので、必ず予習し、レポートすること。					
授業の属性・履修上の区分						
☐ アクティブラーニング		☐ ICT 利用		☐ 遠隔授業対応		☒ 実務経験のある教員による授業
授業計画						
		週	授業内容	週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	[1] オリエンテーション 授業の目標と計画を説明し、授業の進め方を決める。基本的には、学生が分担した教科書の範囲をレポートにまとめ発表し、それについて全員で討論する形式をとる。	授業の目標と計画を理解し、説明できる。		
		2週	[2] これまでの集合住宅計画の変遷と到達点 これまでのモノづくりに偏した集合住宅計画について、集住主体の形成がどの程度考えられていたかを再点検する。	施設の段階的構成論、住棟配置、コモンスペース配置、通路形式、住戸平面について確認できるが、結果的にそれら空間の仕掛けのみでは、コミュニティ形成の主体的条件の育成というよりも生活問題の消極的あるいは回避的解決しかもたらさず、集住のサポート的役割でしかなかったことを説明できる		
		3週	[2] これまでの集合住宅計画の変遷と到達点 これまでのモノづくりに偏した集合住宅計画について、集住主体の形成がどの程度考えられていたかを再点検する。	施設の段階的構成論、住棟配置、コモンスペース配置、通路形式、住戸平面について確認できるが、結果的にそれら空間の仕掛けのみでは、コミュニティ形成の主体的条件の育成というよりも生活問題の消極的あるいは回避的解決しかもたらさず、集住のサポート的役割でしかなかったことを説明できる		
		4週	[2] これまでの集合住宅計画の変遷と到達点 これまでのモノづくりに偏した集合住宅計画について、集住主体の形成がどの程度考えられていたかを再点検する。	施設の段階的構成論、住棟配置、コモンスペース配置、通路形式、住戸平面について確認できるが、結果的にそれら空間の仕掛けのみでは、コミュニティ形成の主体的条件の育成というよりも生活問題の消極的あるいは回避的解決しかもたらさず、集住のサポート的役割でしかなかったことを説明できる		
		5週	[3] 集住の意味と共同性 集住は人間が獲得した住文化であり、その良さと困難さ(集住の楽しさと煩わしさ)を考える。	事例を通して、集住での「暮らし」にクローズアップし、メリット・デメリットなどを説明できる		

		6週	[3] 集住の意味と共同性 集住は人間が獲得した住文化であり、その良さと困難さ(集住の楽しさと煩わしさ)を考える。	事例を通して、集住での「暮らし」にクローズアップし、メリット・デメリットなどを説明できる
		7週	[3] 集住の意味と共同性 集住は人間が獲得した住文化であり、その良さと困難さ(集住の楽しさと煩わしさ)を考える。	事例を通して、集住での「暮らし」にクローズアップし、メリット・デメリットなどを説明できる
		8週	[4] 居住者参加型としてのコーポラティブ住宅 住民参加型の居住地計画の事例としてコーポラティブ住宅の建設前から竣工後までの実践例を学習する。	居住主体相互、居住主体とプランナー相互、居住主体と地域相互の働きかけを学ぶ中からプランナーと集住主体との関わりを考え、説明できる。
	2ndQ	9週	[4] 居住者参加型としてのコーポラティブ住宅 住民参加型の居住地計画の事例としてコーポラティブ住宅の建設前から竣工後までの実践例を学習する。	居住主体相互、居住主体とプランナー相互、居住主体と地域相互の働きかけを学ぶ中からプランナーと集住主体との関わりを考え、説明できる。
		10週	[5] シェアハウスや、現代ならではの集住のあり方について事例を通して学ぶ。	現代ならではの集住の課題について説明できる
		11週	[5] シェアハウスや、現代ならではの集住のあり方について事例を通して学ぶ。	現代ならではの集住の課題について説明できる
		12週	現代における集合住宅の実例を調べる。	コーポラティブ住宅のみならず、現代の暮らしに合わせて様々な種類、形式が生み出されていることを理解し、説明できる。
		13週	現代における集合住宅の実例を調べる。	コーポラティブ住宅のみならず、現代の暮らしに合わせて様々な種類、形式が生み出されていることを理解し、説明できる。
		14週	現代における集合住宅の実例を調べる。	コーポラティブ住宅のみならず、現代の暮らしに合わせて様々な種類、形式が生み出されていることを理解し、説明できる。
		15週	現代における集合住宅の実例を調べる。	コーポラティブ住宅のみならず、現代の暮らしに合わせて様々な種類、形式が生み出されていることを理解し、説明できる。
		16週	発表会	調べた内容についてパワーポイントを用いて発表する。

モデルコアカリキュラムの学習内容と到達目標

分類		分野	学習内容	学習内容の到達目標	到達レベル	授業週
専門的能力	分野別の専門工学	建築系分野	計画・歴史	居住系施設(例えば、独立住宅、集合住宅など)の計画について説明できる。	5	前2,前3,前4,前5,前6,前7,前8,前9,前10,前11,前12,前13,前14,前15

評価割合

	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	0	0	0	0	100	0	100
基礎的能力	0	0	0	0	0	0	0
専門的能力	0	0	0	0	100	0	100
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0